

連続ワークショップ「性なる仏教」第1回 性の超越と仏教

開催日時：2022年9月10日（土）12:00-16:00

会場：龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール

（及びzoomウェビナーによるハイブリッド開催）

参加者人数：約70人

■研究発表

発表1 「転変する性」

岸田 悠里（比叡山延暦寺叡山文庫）

発表2 「律蔵に記載される「性転換」した人々―上座部の比丘尼僧伽復興に関連して―」

サッチャーナンディ（龍谷大学）

発表3 「鎌倉時代の転女比丘尼」

大谷 由香（龍谷大学）

■座談会

◆司会：大谷 由香

【報告の概要】

仏教はこれまで成人男性中心に語られることが多かったが、仏教の起源から女性やLGBTQの人々は存在していた。性についての捉え方は多様であり、例えば、性的指向、性自認、性的特徴やジェンダー表現などが挙げられる。これらをもとにした現実の性のあり方は、男や女の二項に明確に分類できるものではなく、グラデーションの中で一人ひとり異なる流動的なものである。以上の視座から仏典を読み直したとき、どのような知見をもたらすことができるのだろうか。各発表の概要は以下の通りである。

岸田氏は、仏典における性転換の事例を取り上げた。仏典では、性別は変わり得るものであると広く認識されており、性転換の事例が数多く存在する。悪因による性転換の事例では、ある比丘や男性が、性欲を生じた対象の羅漢が実は男性であったことから、自身が女性へと転換した記述を紹介する。しかしその一方で、性的指向が男性＝女性という型がそれらの記述から読み取れるのではないかと氏は指摘する。性転換する仏典の事例では、性に普遍性はなく、揺らぎ得るものではないかと氏は主張した。また、非男非女の事例からは、仏は一切諸法において男でなく、女でもないと言く。この思考には、あらゆる存在や事象には普遍性がないことを説く、空の思想が垣間見られる。しかし、空の思想は、大乘仏教において男女平等を促す思考とは至らなかった。氏は、この原因について藤田宏達論を引きながら、空の思想から導き出される男女平等は、現実の差別構造を是正することのできない、理想論でしかなかったからだと言明する。次に氏は、この打開策として藤田が提示する女から男への性転換（変成男子）の思想に注目する。仏教において、女性の姿をした存在は成仏できないとされてきた。従って女性は、成仏するために男性への性転換が必要とされる。しかし、ある仏典の記述では、女性の外見を持ちつつも、内面は菩薩に達していると解釈できるのではないかと、という議論もある。この指摘から、仏典は本質的に男性も女性も存在せず、性別は流動的に変化し続けるものであることを言っているのではないかと、氏は最後に指摘した。



岸田 悠里氏

ナンディ氏は、「パーリ律」および漢訳の諸律蔵に説かれる性転換の事例を示し、その異同を明らかとした。比丘 / 比丘尼が性転換した場合、どちらも僧伽から追放されず、変化した性別に対応する僧伽に編入する。この対処は、『四分律』、『五分律』、『十誦律』や「パーリ律」で一致している。しかし、「パーリ律」では、男女両形が生じたり、自然に欠損したり、他者に損壊されたり、自ら切断したりする事例についての言及が全くない一方で、『四分律』や『五分律』そして『十誦律』では共通して言及されている。ただし、漢訳の諸律蔵もそれぞれ詳らかにしている点や、その対処法に大きな相違が見られ、必ずしも一致してはいない。そもそも律蔵には、性転換したという者の真偽を、実際にその者の身体を確認して判定するなどの術について記載がなく、その規定も存在していない。その事実からすれば、性転換はあくまで自己申告によるものであったのかもしれない。現代の常識からすれば、「人が自然に性転換する」こと自体、常軌を逸したことではある。しかし、本事象が諸々の律蔵に伝え記され、また現代における比丘尼僧伽復興の鍵として(たとえ揶揄気味にであっても)、ミャンマーの僧統によって論じられている以上、それがいかなることか真剣に探るべき問題であろう、と氏は考える。ただし、本研究は未だ途上であり、諸律蔵の性転換事例についての所伝を完全に調査できておらず、また論ずべき課題を多く残している状態である。氏は、今後より一層、諸律蔵はもとより律註や古代インドにおける性転換についての研究を深めていく予定である。



サッチャーナンディ氏

大谷氏は、鎌倉時代の戒律復興運動について発表を行った。氏を取り上げた「大悲菩薩帝釈讃碑文」には、帝釈天が比丘教団に比丘尼の戒行を促し、彼を比丘尼にした逸話が存在する。他方、『聖誉鈔』では、教団の姉とされる真如が出家に悩んでいたところ、ある比丘僧（教団）が比丘尼へと転変し、真如の出家を助けた記述が存在する。このような教団の比丘から比丘尼への性の転変事例は、比丘尼僧伽復興のために生じたものである（復興したのち、教団は比丘へと戻った）。教団と真如による活躍に端を発し、比丘尼の数が増加していった。鎌倉時代に比丘尼僧伽が途絶えた時に、男性である比丘がまず比丘尼へと転変し、復興へ寄与した点は非常に興味深く、現在の状況においても学べる点が多くあるのではないかと氏は指摘した。



大谷 由香氏

後半の座談会では、参加者からの質問やコメントを取り上げつつ、登壇者間において活発な議論が展開された。「トランス当事者としては、性転換という言葉には違和感がある」というコメントに対して、大谷氏は、以下のようにリプライした。「性転換という言葉は、悩みながらも使用した。仏典を読むと、突然に性が変わった、まさに転換と表されるような記述がなされている。ただ、仏典の表記では、所与の男女の二項間を行き来する前提しか想定していないように読み取れる。」岸田氏によれば、仏典において性転換もしくは移行に相当する記載は、「転」や「変」と記されている。また、「仏典に記されている男根、女根は性器を指すのか」という質問には、「性器を意味していると考えられるが、例えばパーリ律では男根はリングと表されるが、そこで象徴されるのは男性器に限らず、男性というアイデンティティではないか。そうであるならば、仏典に男根、女根という記載を男性器、女性器とのみ見做すのは疑問である。また、身体は男性でも心は女性と解釈することもできるのではないかと、もしくは服装をもってして解釈することもできるのではないかと、など様々な意見が登壇者から出た。いずれにせよ、仏典に記載されている言葉をいかに私たちが読み込んでいくのか、については今後の重要な課題の一つとした。黄門、二根の記述についても、それらが身体を指すのか、心を指すのか、詳細な資料が見当たらない。性の転換、転変や移行は、身体的なものによるものなのか、心によるものなのか、議論は耐えない。しかし、岸田氏の発表で提示された「一切諸法は男でなく、女でない」という空の思想に基づいた維摩経の一節から考えれば、仏教における救済は、身体的特徴によって分類された一部の性のみを対象

としているのではない。この思考を単なる理想論として片付けてしまうのではなく、現実社会において私たちがいかに実践していくのか考えることは、重要な視点である。この点を最後に確認したのち、本ワークショップは閉会となった。



左から岸田 悠里氏、大谷 由香氏、サッチャーナンディ氏

(文責 ジェンダーと宗教研究センター)